

北九州の黎明期―明治三〇年代

館長 今川 英子

一〇〇〇号の大樹を囲む祝い酒 龍太郎
川柳誌「川柳くろがね」の一〇〇〇号発刊（二〇二五年三月）、おめでとうございませう。

昭和四（一九二九）年二月創刊。それ以前の歴史を紐解くと、八幡製鐵所が開所した翌年（明治三五年）に文芸愛好家により刊行された「パーセント倶楽部」には既に川柳欄があったと言われています。その後は所内の文芸総合誌「洞海」に受け継がれ、廃刊後は「時報くろがね」に拠り、昭和三年に「川柳くろがね吟社」を創設、翌年創刊。戦争中の休刊はありましたが、営々と「川柳くろがね」は刊行され、一九九九年四月に「八幡製鐵所同好会」から離脱、地域社会に飛び出し北九州の川柳を牽引しています。

五〇〇号記念誌（一九八三年八月）での当時の市長谷伍平は、「一地方の文芸団体としては稀有の足跡」、「この業績の中には、母体八幡製鐵所の歴史があり、鉄と共に生きた強固な鉄人の国治への熱意が感じられる」と述べていて、北九州市の文芸活動の特徴でもある職場内雑誌を母体とした活動の典型をみる事ができます。

先日の火野葦平原作、齋藤雅文脚本、長塚圭史演出による演劇「花と龍」（J・COM北九州芸術劇場三月一五・一六日）は、スタンディングオペレーションに包まれ大成功でした。パンフレットには「明治時代の終わり、石炭産業で活況に沸く北九州の若松港」「荷役労働者『ゴンゾ』を生業とする男・玉井金五郎と女・マン」「欲望と希望渦巻く北九州と、そこから飛び立つ夢を抱く男と女の、たぎる生命力の物語」と地元観客の胸襟を鷲掴みにする言葉が並びます。舞台という場面転換の制約を受けながら、台詞などもそのままに原作にほぼ忠実に描かれてい

ました。今、なぜ「花と龍」？金五郎の「腕と度胸、正義感」、マンの「器量と愛の深さ」への郷愁？観客席は中年以上の男性が目立っていました。

明治のこのころ、森鷗外が第一二師団軍医部長として小倉に赴任（明治三三年）。僅か二年十ヶ月でしたが、彼の作家的生涯においていかに重要な時期であったかを論じ、ご指導賜った山崎一穎先生が、九月一四日に急逝されました。先生には当館での特別企画展「森鷗外をりの微笑」（二〇〇七年秋）で監修をお願いし、また鷗外旧居の遺る自治体の首長（津和野町長・文京区長・北九州市長）が揃った「鷗外サミット」でも基調講演をいただきました。最近では鷗外の京町での住所確認や、小倉赴任・離任往復路の交通手段などの論考も発表され、大いに啓発されたところでした。跡見学園理事長、全国文学館協議会会長を歴任され、森鷗外記念館館長（津和野町）の他、文京区立森外記念館主催も監修。昨年刊行された『森鷗外論攷完』は先の『論攷』二冊を合せ総頁数二千五百頁を超える大著であり、鷗外研究者として第一線を駆け抜けた先生の重厚な集大成となりました。当館におけるご支援とご鞭撻に心から感謝申し上げます。

昨春秋からは「門司情景―文学でたどる」展を開催。門司港での鉄道遺構の発見なども含め、奇しくも明治期の北九州市の黎明期を再考する機会が重なりました。

締めくくりに前回、今回と続いた林芙美子文学賞受賞者の芥川賞受賞を欲びたいと思います。朝比奈秋さん、鈴木結生さん、さらに新しい文学の沃野への挑戦を期待いたします。

目次

- 巻頭コラム「北九州の黎明期―明治三〇年代」…………… 1
- 第35回特別企画展…………… 2
- 「門司情景―文学でたどる」
- 子どもの読書応援フェスタ！
- 朗読指導者・読書活動推進者のための勉強会・交流会…………… 3
- 高橋睦郎さん文化勲章受章記念講演会…………… 4
- 第11回林芙美子文学賞表彰式・記念トーク…………… 5
- 鈴木結生さん芥川賞受賞
- 第16回子どもノンフィクション文学賞…………… 6
- 九州の川柳句碑写真展、「川柳くろがね」誌一〇〇〇号刊行
- 檜山荘子ども俳句大会
- 第15回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール…………… 7
- 歌とピアノによるデュオコンサート
- 福岡ユネスコ文化講演会
- 友の会自主企画「黒崎古書店めぐり」
- 「文学館友の会」新規会員を募集
- 第47回光草書道展…………… 8
- 「北九州市立文学館紀要」第7号刊行
- 2024年度下半期「偲ぶ会」
- 展覧会開催予告
- 〔第36回特別企画展〕「戦争と文学者―火野葦平、林芙美子の場合」(仮)
- お祝い、お悔やみ／寄贈者・提供者、提供雑誌

第五高等学校に赴任する際、門司から鉄道に乗り、森鷗外も小倉赴任時、門司港に上陸し、鉄道で小倉に向かいました。また、日本銀行西部支店が下関の飯店舗から門司に移り、多くの銀行や企業が門司に支店を出し、門司港地域は急速に発展していきました。

日露戦争では第二軍に森鷗外が軍医として、従軍記者として田山花袋がおり、門司港に寄港しました。鷗外は『うた日記』に、花袋は『第二軍従征日記』で、門司について記しています。

大正から昭和初期には多くの作家が海外渡航し、国際港であった門司港を訪れました。芥川龍之介、斎藤茂吉、与謝野晶子・寛夫妻、高浜虚子、横光利一らが、渡航の際に、門司について書いています。

またこの時代に門司で幼少期を過ごした山田稔、赤瀬川隼、尾辻克彦が当時の様子をそれぞれの作品で描いています。

【第三章 昭和から現在】

日中戦争時、門司港は軍事中継基地の役割を担いました。門司港から火野葦平、宮柊二が中国に出征。葦平は『土と兵隊』に門司港から出征していく様子を書き、宮柊二は歌を詠みました。太平洋戦争時には大岡昇平が門司からフィリピンへと出征、小説『出征』、『俘虜記』でその様子を書いていきます。

戦中の門司については、井上光晴が『虚構のクレール』で門司への空襲を書いています。また関門海峡がアメリカ軍の機雷投下で封鎖。光岡明は『機雷』でその掃海作業を書き、門司に育った高橋睦郎は目の前で機雷が炸裂し、船が沈むさまを描いています。

敗戦後、門司は引揚港となり、本州

への接続点でもあったため、多くの引揚者で混雑しました。藤原新也は幼少時の記憶としてその様子を書いていきます。また一九五三年の西日本水害についてはたまたま遭遇した内田百閒が『第二阿房列車』で書いています。また門司出身の平出隆は少年のころの50〜60年代の門司の様子をエッセイで書いています。

また司馬遼太郎『街道をゆく』のほか、宮脇俊三、田中小実昌らの紀行文で門司・関門海峡が書かれ、西村京太郎や斎藤栄などの推理作家のトラベルミステリーでも舞台となっています。交通の発展で通過地点となり経済が停滞していた門司港は、一九九五年に門司港レトロがオープン、現在は観光地として賑わっています。町田そのこ『コンビニ兄弟』や東川篤哉『もう誘拐なんてしない』にはその様子が描かれています。

(展示資料点数約200点)

来場者の声 (アンケート)	
門司・門司港という場所だけにテーマを絞ってもこれだけ多くの作家がさまざまな作品を描いていて当時の門司が栄えていたことがわかりました。	(20代・若松区)
千年以上もの長い間、門司が文献に記され続けていることを知り、改めて門司の重要さを感じられました。また時代とともに変化している姿も思い浮かび、おもしろかったです。	(40代)

子どもの読書応援フェスタ！ 朗読指導者・読書活動推進者のための勉強会・交流会

二〇二五年二月二十七日

朗読や読み聞かせに関心がある方々を応援するイベント「子どもの読書応援フェスタ！」として、「朗読指導者・読書活動推進者のための勉強会・交流会」が文学館で開催されました。主催の公益財団法人文字・活字文化推進機構は、「子どもの読書活動の推進法」、「読書バリアフリー法」、「文字・活字文化推進法」の具現を通じて、言語力豊かな国民生活と創造的な国の実現に向けた活動を展開する団体です。

まず、元NHKアナウンサーで朗読指導者養成講座講師の山根基世さんが基調講演を行いました。山根さんは、子ども時代に本を読むことで、言葉の力で未来を拓くことのできる力を身に



山根基世さん



読み聞かせの様子

着けられると話されます。朗読は子ども的人格形成に寄与するものであり、朗読指導する人が集まる仕組みを地域に作り、子どもの言葉を育てる活動を活発にすることで、大人と子どもが繋がることできると話されました。このあと、朗読活動を実践されている方の報告に続き、ふたたび山根さんが登壇、高峰秀子のエッセイを朗読されました。

七五名の聴衆は熱心に耳を傾けていました。イベントの様子は、文字・活字文化推進機構のYouTubeチャンネルでダイジェスト版動画が配信される予定です。

また、朗読活動の実践として、子ども図書館 おはなしコーナーでの読み聞かせも行われました。

高橋睦郎さん

文化勲章受章記念講演会

二〇二五年三月一日

会場 J・COM北九州芸術劇場

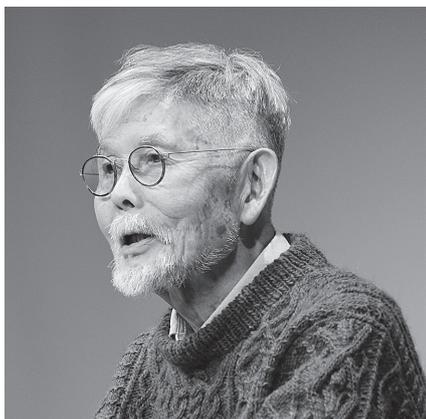
小劇場

参加者 一六〇名

詩人・高橋睦郎さんの二〇二四年度文化勲章受章をお祝いして、高橋さんの故郷である本市で記念講演会を開催しました。

高橋さんは一九三七年、北九州の旧八幡市で生まれ、直方、八女での生活を経て、小学校一年の夏休みから大学卒業まで門司で過ごされました。講演会は「文字に導かれて」と題され、高橋さんの創作活動につながっている出来事や、人との出会いについて話されました。

高橋さんが、聞くことから言葉を感じ、さらに文字を読み始めたのは、直



高橋睦郎さん

方で暮らしていた時期（一九三七～四年）でした。八幡製鐵所勤務の父親が高橋さんの生後一〇五日目に亡くなられ、父親の実家のあった直方に母親とともに移り住まれます。母親がまかないの仕事をしていた三菱炭鉱の事務員の独身寮の寮生たちから平仮名、片仮名、漢字を教わり、小学校入学前から文字を読まれていたそうです。また、祖母や近所のおばあさんの浄瑠璃の語りや歌を繰り返し聞いたことは、かけがえのない体験でした。「二人の歌や語りはしみじみとしていて」、「毎日自分からねだって繰り返し聴くことで幼い魂に染みわたって、僕の悲劇精神を養ってくれ」と振り返られます。

門司に移り住んだ小学校時代には、母親が売らずに残してくれた亡父の蔵書の一冊だった『少年文学集』（改造社）を熱心に読まれ、そのうちの一冊、巖谷小波『こがね丸』は文語体でしたが、総ルビがふってあったおかげですべて理解できなくとも読むことができました。さらに古典を読む際にも抵抗がなかったそうです。繰り返し読むことは暗記につながり、「暗記は一種の言語模倣」、「言葉の身体化」であることから、創作にもつながっていったと話されました。

中学校時代は、高橋さんにとって「導き」となった特別な本との出会いがありました。呉茂一訳『ギリシアラテン抒情詩集』です。同級生に誘われ入部した文芸部部室の片隅にあった本棚か

ら、何気なく手にとった本でした。「何の気もなくめくったページから、まるで突然の眩しい光のような数行が立ち上がって」、高橋さんの「幼い感受性を震え上がらせ」ます。「この一冊との出会いがなかったら、僕が詩にのめり込むことはなかったと断言できる」と言われるほど高橋さんを導いた一冊でした。

さらに、文芸部顧問の先生にご自身の詩を見てもらううちに、書くことが習慣になったそうです。投稿少年でもあり、詩、短歌、俳句、作文などを投稿し、「毎日中学生新聞」（西部版）では入選、入賞第一等の常連で、ファンレターがたくさん届いたエピソードも紹介されました。

また、日本の文芸の基礎は歌で、歌人は「歌詠み」といわれ、「詠む」は「呼ぶ」に通じているというお話をされました。対象となるモノの魂に呼びかけ、歌の形に呼び込み定着することが第一の「詠む」、次に歌の形になったものを自分のなかに呼び込むことが第二の「読む」で、「歌詠みは、歌の創作者であるとともに、読書家であり、注釈者だっ



た」と話されました。そして、人は生まれてから最初に「母の呼びかけ」を聞き、聞くことで学び、言語以前の声を発して母に呼びかける——と「呼びかけ」の原点について話され、ご自身の母親へ呼びかけた詩を数編、朗読いただきました。現在、高橋さんは、古代ギリシアのホメロスから、現代アルゼンチンのボルヘスまで、五〇数人の詩人に呼びかける詩作品「あなたへ——過去という名の未来への呼びかけ」を連載中（『現代詩手帖』）です。

最後に、会場の参加者からの質問にもざつぱらんにお答えいただき、高橋さんの懐の深い人間性に触れ感激する声が多く聞かれました。

「文字で書いて生きていく」高橋さんの人生の導きとなった様々な出会いについてお聞きし、朗読で高橋さんの詩を味わうことができた豊かな時間となりました。

来場者の声（アンケート）

・ 詩との出会い、詩へ導いた母上様、そして多くの知人の尊さ、これらに対する感謝の気持ちが伝わってまいりました。

（小倉北区・80代）

・ 詩の朗読にとてもひかれました。光と闇とのドラマチックでシヨッキングな感情の発露にとても胸を打たれました。

（門司区・60代）

第11回林芙美子文学賞

表彰式・記念トーク

二〇二五年二月二三日

11回目を迎えた林芙美子文学賞の表彰式・記念トークを北九州市立男女共同参画センター・ムーブにて開催しました。
(参加者：二二〇人)

●表彰式

全国から寄せられた五三〇編の応募作品の中から、神奈川県在住の津田美幸さんの「アナグマ」が大賞に、北海道在住のチヒロ・オオダテさんの「燃ゆる海」が佳作に選ばれました(受賞決定後「燃ゆる馬」に改題)。

表彰式には、最終選考委員の井上荒野さん、角田光代さん、川上未映子さんが出席されました。



今川館長から表彰を受ける津田さん

津田さん、オオダテさんには北九州市立文学館の今川館長から、表彰状と盾、副賞(大賞は一〇〇万円、佳作は一〇万円)が授与されました。

受賞者挨拶で津田さんは、「自然を言葉で描写したいと考えたことと、ちょっと悪い子のお話を想像したのが創作のはじめだった」、「私にとって小説を書くことは考えることなので、これからも考えていきたい」と、また、オオダテさんは、小説を読むことの面白さ、読み手の存在を意識するようになった体験の衝撃が「今も夜の海の灯台のように、書くときの指針となっています」と述べられました。

最終選考委員の講評では、大賞作品は、描写や会話を含め文章が本当に上手く、勘所が全編に効いていると評されました。佳作作品は、躍動感や迫力のあるディテールが素晴らしく、また、偶然性が活かされて唯一無二の人生が描けていると評価されました。

今後の応募作品には、「書く人も読者も知らなかったことに近づいていくような小説を読みたい」(井上さん)、「見慣れた景色に改めて驚かされるような作品が楽しみ」(角田さん)、「楽しんで、まだ名づけられていないものを言葉で見つけて欲しい」(川上さん)と期待を寄せられました。来場者へは、「いい小説は、読んでいるうちにぱっと世界が広がるような素晴らしい瞬間が来る。最初は難しいと思っても手を伸ばしてみて」(井上さん)、

「小説は百人いれば百通りの読みがあつていい。自由に読んで欲しい」(角田さん)、「読書は日常の中でもう戻って来られないような『危険な』経験ができる身近な場所」(川上さん)とそれぞれメッセージを寄せられました。

●記念トーク

朝比奈秋さんが「林芙美子文学賞を受賞してから」と題し、講演されました。朝比奈さんは二〇二一年、第七回林芙美子文学賞で文壇デビューされたのち、三島由紀夫賞、泉鏡花文学賞、野間文芸新人賞、芥川賞を受賞されています。

医師として働くなか、どうしても救いきれない患者や家族の前にして苦しみに襲われ絶望の底に陥ったとき、困難を受け入れ、希望を見出した過去の偉人たちの存在が光明になった体験を話されました。過去の傷・トラウマに



朝比奈秋さん

は向き合うことが重要で、向き合うことで自尊心が取り戻せたと話されました。

また、高山羽根子さん(第二回)、鈴木結生さん(第一〇回)と芥川賞受賞者を多数輩出していることから、芙美子賞は活躍し続けられる小説家を見出している賞といえる、津田さん、オオダテさんにも活躍を期待しているし、来場者にも甥や姪のように応援してほしいと締め括られました。

鈴木結生さん芥川賞受賞

二〇二五年二月二三日

第一〇回林芙美子文学賞受賞者の鈴木結生さんが、「ゲーテはすべてを言った」で第一七二回芥川賞を受賞されました。鈴木さんは敬愛する大江健三郎さんと同じ二三歳で受賞したいとの願いを実現されました。

贈呈式で鈴木さんは、式の前に東京大学で大江さんの直筆原稿を閲覧し推敲の跡を見て自らの小説観を再

考したと述べ、さらに「最後にありえたかもしれない可能性すべてを肯定する瞬間が訪れることを目指して小説を書いていると思います」と話されました。



鈴木結生さん

第16回 子どもノンフィクション文学賞

二〇二五年三月二日

この文学賞は、多彩な文学者が築いてきた北九州市の文学の土壌を次世代へ継承していくことを願い、子どもたちが「見たこと」「聞いたこと」、「体験したこと」をもとに調査、取材し、ノンフィクションの文章として描くことで、周りの人々や社会への関心を持つきっかけにしておうと、2009年から実施をしているものです。今年で16回目を迎えました。

今年度は、北九州市内外から小学生の部に133作品、中学生の部に99作品、計232作品の応募がありました。表彰式は文学館交流ひろばで行われ、最終選考委員のあさのつとさん、



最相葉月さん、リリー・フランキーさんにご出席いただき、受賞者の皆さんへ、盾と副賞が贈られました。受賞者にはそれぞれ受賞スピーチをお願いしました。

最終選考委員の方々からは講評をいただきました。小学生の部の大賞の片桐紡さんには、面白く読めるようういて哲学的でもある(あさのつとさん)、家庭のことを書いているが国際平和論にも通じて素晴らしい(最相さん)、文章の組み立ても完成している(リリーさん)と、評されました。中学生の部の大賞のチャケレオンさんは過去三回入賞歴があり、家族の歴史を描き続けてこられました。他にない貴重な記録の集積であり、充分に大人の本として読める(最相さん)、年々うまくなっていて、本作は集大成(リリーさん)、さらに世界や時代を対象にしたものも読みたい(あさのつとさん)、と、チャケさんは今年で「卒業」ですが、今後にも期待する声が寄せられました。

表彰式には、大賞受賞者の先輩である梅田明日佳さん、座間耀永さんがお祝いにかけつけてくれました。お二人の活躍は素晴らしいもので、座間さんは第3回Reライフ文学賞最優秀賞を受賞、作品『父の航海』が刊行されました。また、起業家としても活動されています。梅田さんは、読売新聞読書面で本の紹介の連載をされています。

受賞作品は過去の作品も含めて、文学館ホームページで読むことができます。

受賞者 小学生の部(敬称略)

大賞 片桐紡(新座市立東北小学校)、優秀賞 能美にな(明治学園小学校) 喜多結理(LCA国際小学校)、選考委員特別賞 川名岳大(板橋区立向原小学校) 立山怜佳(大阪市立阪南小学校) 若狭早(愛媛大学教育学部附属小学校)

受賞者 中学生の部(敬称略)

大賞 チャケレオン(Jakob-Fuggel-Gymnasium)、優秀賞 孫莉佳(日本女子大学附属中学校) 辻陽菜子(北九州市立篠崎中学校)、選考委員特別賞 我那覇優愛(宮古島市立伊良部島中学校) 大水音諒(岡崎市立岩津中学校) 八尾結花(筑波大学附属中学校)



九州の川柳句碑写真展、「川柳くろがね」誌 1000号刊行

二〇二五年三月一日(三〇日)

川柳くろがね社(主宰・安川聖)主催で、九州の川柳句碑を紹介する展覧会が開催されました。九州の川柳の発展に寄与した柳人たちの句を伝える碑を通じて、九州における川柳のありようと豊かさを感じられる展示でした。

また会報誌の「川柳くろがね」は二〇二五年三月号で発刊一〇〇〇号を迎えました。一九二八年に会が創設された翌年に創刊、戦中に一時休刊しましたが、九六年を経ての記念号刊行となりました。



力作せいぞろい 「榎山荘子ども俳句大会」

榎山荘やそこまにまつわる文化や歴史を知ってほしいとの思いから、榎山荘子ども俳句大会実行委員会(北九州俳句協会、久女・多佳子の会、ほか)主催で二〇〇五年から毎年開催されているこの俳句大会は、今年度で20回目を迎えました。

北九州市を中心に、小学校、中学校、特別支援学校の計64校から、五四三三句の応募があり、特別賞11作品、秀作36作品、学校賞2校などが選ばれました。

文学館では、12月8日(12月28日)の間、特別賞・秀作作品の展示を行いました。生き生きとした作品にうなずきながら感心される方や、照れくさそうに作品と一緒にカメラに収まる子どもの姿などが見られました。

第15回「あなたにあってたくて生まれてきた詩」コンクール

二〇二四年二月七日

北九州市立文学館では、北九州市出身の詩人 宗左近、みずかみかずよを顕彰するとともに、子どもたちの豊かな想像力と表現力を伸ばすことを目的に、「あなたにあってたくて生まれてきた詩」コンクールを実施しています。

第15回目を迎える今年度は、北九州市内外から小学生の部に168作品、中学生の部に857作品、計1025作品の応募があり、表彰式は文学館交流ひろばで行われました。

表彰式では、受賞者の詩の朗読や、最終選考員の平出隆さんの講評がありました。講評は、平出さんを受賞者が囲んで対話形式で行われ、受賞者の作品制作の過程の話聞くことができ、より受賞作品を楽しむことができました。

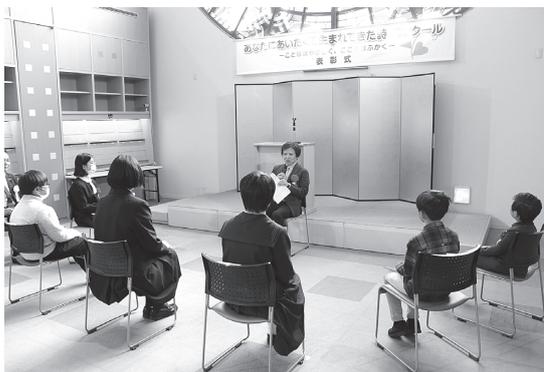
受賞者 小学生の部（敬称略）

宗左近賞 田島璃玖斗（北九州市立赤崎小学校）みずかみかずよ賞 芳賀董（国府台女子学院小学部）北九州市長賞 石東暁（京都教育大学附属京都小中学校）北九州市教育長賞 平賀はる（京都教育大学附属京都小中学校）北九州市立文学館長賞 才田唯喜（北九州市立曾根東小学校）

受賞者 中学生の部（敬称略）

宗左近賞 木村優衣奈（女子美術大学付属中学校）みずかみかずよ賞 漆畑美咲（鹿児島純心女子中学校）北九州

市長賞 山本埜乃華（女子美術大学付属中学校）北九州市教育長賞 高倉纏（女子美術大学付属中学校）北九州市立文学館長賞 川野奈菜（和歌山県立田辺中学校）



歌とピアノによるデュオコンサート

二〇二四年二月三日

北九州音楽協会の訪問コンサートの一環として、白川深雪さん（ソプラノ歌手）と後藤トモ子さん（ピアノ）によるコンサートが開催されました。オペラ「トスカ」や「レクイエム」など本格的な楽曲から、参加者も一緒に合唱した「ふるさと」まで、幅広いプログラムが用意され、音楽の迫力と魅力に触れた一日となりました。



福岡ユネスコ文化講演会

二〇二四年一月一日

福岡ユネスコ文化講演会「文学が描くイタリアと移民」を開催しました。イタリア文学者・翻訳家である栗原俊秀さんを講師として迎え、文学作品を通して移民の歴史やイタリア人の生活、文化を紹介いただきました。翻訳業界の裏話などもお話しいただき、聴衆は興味深く聞かれました。



友の会自主企画 「黒崎古書店めぐり」

二〇二四年二月八日

八幡西区の黒崎駅周辺にお店を構える三つの古書店にご協力をいただき、「黒崎古書店めぐり」を開催しました。17人の参加者は、ほかほか陽気の中を楽しく歩きながら回りました。

店主からこだわりや特徴などのお話を聞き、みなさん、お気に入りの本や掘り出し物を見つけていました。

参加者からは「いろんなタイプの古書店があつて、面白かった」「こんな企画を待っていたので、楽しかった」などの声が寄せられました。

「文学館友の会」新規会員を募集

友の会活動は、文学や文学館に関心がある人々が集まり、文学・文芸に関する知識教養、理解を深めるとともに、文学館の活動を支援することを目的とします。どなたでも入会できます。

【会員期間】二〇二五年四月一日～二〇二六年三月（一年ごとの更新）

【会費】二〇〇〇円

【特典】

- 常設展がいつでも見られる「年間定期券（年間パスポート）」
- 「特別企画展」招待券（二枚）
- 特別企画展の図録（文学館製作分、一冊）
- 文学館が実施する文学賞の「作品集」（一冊）
- イベント、講演会等への優先参加
- 館報、友の会会報を郵送 など

【問い合わせ】

北九州市立文学館友の会事務局（文学館事務局内）

☎093-571-1505

戦争と文学者

—火野葦平、林芙美子の場合 (仮)

2025年7月19日(土) ▶ 9月28日(日)



1938年9月 林芙美子らペン部隊を上海で迎える火野葦平
左2人目から林芙美子、片岡鉄兵、久米正雄、火野葦平

戦後80年を考える
かつて、文学はどのように戦争に動員され、文学者はどのように戦争に関わったのか。北九州ゆかりの文学者である火野葦平、林芙美子と戦争との関わりをたどります。

毛筆で描く…… 村田喜代子の世界

予告
(共催)

第47回光草書道展

会期：2025年4月26日(土)～5月6日(火)
会場：北九州市立文学館 企画展示室

関連イベント

村田喜代子さん特別講演

「わたしは文字を書くのがものすごく下手だった」
日時：2025年4月27日(日)13時～14時30分
※4月17日(木)から電話093-571-1505で受付開始
定員：60人

「北九州市立文学館紀要」 第7号刊行

・【資料紹介】宗左近(縄文)ノート
解題・翻刻(3)(稲田大貴・小野芳美)
・主な寄贈資料 二〇二三年度
今号より、紙出版を終了し、当館ホームページでの電子版公開のみといたしました。

二〇二四年度下半期「偲ぶ会」

一月一九日 第65回葦平忌(若松区・若松市民会館)
一月二一日 久女忌(小倉北区・圓通寺)
三月二六日 第48回森鷗外をしのぶ春の集い(小倉北区・森鷗外京町住居跡碑前)

お祝い

・伊藤比呂美さん(詩人)が、第83回西日本文化賞を受賞されました。
・高橋睦郎さん(詩人)が、二〇二四年度の文化勲章を受章されました。
・角田光代さん(作家)が、第59回吉川英治文学賞を受賞されました。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・山崎一穎さん(森鷗外記念館「津和野町」館長、学校法人跡見学園前理事長)二〇二四年九月一日にご逝去、85歳。
心からお悔やみ申し上げます。

寄贈者・提供者

青柳文吉、荒木輝二、有川公一、有馬記念館保存会、有森信二、粟谷さやか、石川桂子、市川市芸術文化団体協議会、市川市立文学ミュージアム、井上靖記念文化財団「伝書鳩」編集室、井本元義、大阪俳句史研究会、大土由美、岡田哲也、加藤邦彦、加藤芳人、角川文化振興財団「俳句」編集部、花鳥社、神奈川近代文学館、金沢湯涌夢二館、萱島さつき、紀伊國屋書店、九州産業大学美術館、近代作家旧蔵書研究会、熊谷紀代、児玉佳久、さいたま文学館、佐久間庸和、座間耀永、柴田康弘、関中子、小豆島尾崎放哉記念館、書肆侃侃房、新宿区立漱石山房記念館、新葉館出版「清流の国ぎふ」文化祭2024、

提供雑誌

青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、海、絵合せ、鷗外、沖、GAGA、海峡派、回遊、季刊午前、北九州文化、今日の花、九州文学、鯨々、現代俳句、自鳴鐘、書馨、scripta、青穂、粂、川柳くらがね、川柳マガジン、川柳むらさき、空、鬢、小さい旗、天籟通信、西日本文化、新墾、虹野、浜木綿、ひびき、ふよう、ぼち袋、八雁、遼、りんどう

2025年3月31日発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

開館時間

9:30～18:00 (入館は17:30まで)

休館日

毎週月曜日
(月曜日が休日の場合は開館し、翌日が休館)
年末年始